

保育の場における子どもの自我の発達について

—子どもの相互的行為の意味理解を通じて—

愛育養護学校	山田陽子
	津守真
	板野昌儀
	西原彰宏
家庭指導グループ	大石恭子
	菊地知子
囑託研究員	浜口順子(貞静保育専門学校)
	中沢健(厚生省児童家庭局)

昨年度の研究において、浜口は「保育において自我は保育者によって気づかれ、省察されるものとして現われること、そして子どもの自我の発達を契機として保育者の自我も機能し、発達すること」を明らかにしている。浜口の考察した自我は保育の場での子どもひとりひとりと他の子ども達や保育者達との相互的行為において顕著に現われると考える。相互的行為とは、相手と互いに調節し合って動く生命的行為を意味する。

本論は保育者である筆者の事例研究であり、他者との相互的行為の中に表れた子どもの自我の発達を考察した。

見出し語：自我、発達、保育、相互的行為、

Ego Development in the Perspective of a Practitioner
Being in Care-and-Education

Youko YAMADA Makoto TSUMORI
Itano MASAYOSHI Akihiro NISHIHARA Junko HAMAGUCHI
Kyoko OISI Tomoko KIKUCHI Ken NAKAZAWA

In our study report in 1989, J.Hamaguchi made clear theoretically that in care-and-education, a child's ego is a concept which is noticed and retrospectively by the adult in mutual relationship, and renewed incessantly during the process. The adult's ego also develops through animating the child's ego and discovering the meaning of his/her own activities. In this report, I tried to make the point concretely by a case study of the process of the care-and-education in school for the children with special needs.

Key words: ego, development, care-and-education, mutual activities

I. はじめに

これは担任をしながらの保育事例研究である。

T子(6歳)は養護学校幼稚部在籍2年目である。T子は今年度になって幼稚部と並行して幼稚園にも籍をおいている。私はT子の入園以来担任保育者(男性1名と女性2名)のひとりであったが、昨年度のT子は他方の女性担任Eとのみ結びつこうとし、私との関係は物理的空間に共生しているという域を殆ど出なかった。そのような関係にあった両者が今年度当初出会うことになった直接の契機は、女性担任Eの欠勤した日にT子と私がかかりを持ったことによる。

本研究では、T子と私との出会いから一年間の両者の相互的行為を中心としてT子と私を含めた他者との相互的行為の実際を述べ、その行為に表現された意味を省察する過程で保育者が理解したT子の自我を記し、他者との相互的行為の中に表れた子どもの自我の発達を考察する。

II. 出会い

1990年4月21日 T子は幼稚園へ行く日も兄(小学部2年)の送迎の為に幼稚部に来る。T子は幼稚園から帰ってきて室内の手洗い場で水を流しながらままごと道具を使って遊び始める。今日は女性担任Eが不在なので、私はT子につきあおうと少し離れた床に腰を降ろした。T子は私の方を見ないが気配は感じているようだ。T子はやらずにはいられないという感じで黙々と水に向っており、兄が帰りの支度を終えて回りの人々がT子に「帰ろう。」と声をかけてもやめようとしない。40分位待たせた後で母親と兄を先にバス停に向わせておいて、それから20分程遊んでから自分で終わりにして気持ちが悪くなった表情をして私におぶわられてバス停へ向った。

私にはT子の水遊びが幼稚園での緊張感を和らげようとする行為に見えた。T子は私に対して直接的なかわりを要求しているようには見えなかったので、この時私は傍にいて彼女が遊び終えるまで見守るといふかわり方をすることで、遊びを肯定する気持ちと緊張がほぐれる過程を共にしようとする気持ちを表現しようとした。

T子が幼稚部での生活を地盤としながら幼稚園へ通い始めたことは、外的世界と自分とを関係付けていこうとするT子の意思のひとつの表れとみなすことができるという意味においてT子の自我の発達と関連していると考えられる。

T子はこの日以来6月の始めまで幼稚園を休んだ。T子は自己主張の強い同年代の子ども集団の中で他者の存

在を意識し、彼らと新しい生活を営む過程で自からというよりも他から自分のこれまでの在り方の変容を迫られているように感じて存在感を脅かされたのだろう。T子はこの時期に敢えて女性担任Eから離れて私との新しい関係を創ろうと試みる過程で存在感を再度確かなものしようとしていると思われた。

III. 展開

1. T子が私と深く結びつこうとした時期(4月~9月)

《自信と葛藤》

4月24日 T子は幼稚園を休んだ。登園してすぐに私とトランポリンをおんぶで遊ぶ。T子は私の背中にベタアツとくっついて甘えているかと思えば、私の髪をひっぱったり、鼻の穴や眼に指を突っ込んだり、足で蹴ったりすさまじい。

この当時私はT子が幼稚園のことは一時据え置きにして幼稚部での生活を楽んでいるように見えていたので幼稚園に通うことでの自信がこういうやりとりとして表れているように思っていた。しかしT子が再度幼稚園へ通いだす6月初めで終わっていることから、そのことと併せて幼稚園へ行かないと自分で決めた後の葛藤が表現されていたことが伺える。

《「T子だけの私」と「私だけのT子」》

4月27日 公園のブランコに乗る。T子は自分一人では乗らずに私の膝に座って私に漕ぐよう要求してくる。T子は低くなると泣きながら「もっとこいでよー早くー。」と云い、高くなると「とめてー。」と言う。私は20分程漕いでから「疲れたから休ませて。」と言うと「ダメ。」と泣いて拒む。間で低く揺れている時にブランコの鎖から手を離して身体全体をこちらに委ねて押し付けてくるようにして揺られている。

5月1日 T子が私よりも先に登園して女性担任Eや母親と一緒に遊び始めていたが、私の姿をみつけると遊びを中断してすぐに私の処へ来て抱かれる。

5月15日 T子が幼稚部で水遊びに夢中になっているので、私はT子から離れて庭でM夫を抱いていると、間もなくT子が保育室から出てきて泣きそうな顔で「Tちゃんもだっこして欲しいの。」と言いつつM夫の足を引っ張ったりひっかいたりして降ろそうとする。

この当時T子は私を「T子だけの私」にしようとするだけでなく、私にとって「私だけのT子」でいようとしていた。2者が一体となることを望まれている感じで、

T子の後側に私が組み入れられた感じを受けていた。T子が私とかかわる子どもへ向けての攻撃的な行為は私を失うのではないかという不安からくるものであり、行為は子どもに向けられているが気持ちは私に向けられていることが伝わってくるので、私はこのような場面で他の子どもが動揺してもかわりが持てないことが殆どだった。そうまでして私を自分に引き付けておこうとするとところにT子の存在の危うさを感じた私は、この時期一日の殆どをT子と一緒に過ごしT子の要求を可能な限り優先しようとした。

《おしっこに行かない》

5月14日 T子は帰りの支度をする前に母親や私に「おしっこしよう。」と誘われると「いやなの。」と応えてトイレへ行こうとしない。勧めれば勧める程頑固に拒むので母親と私は無理強いをしないことにする。今日は午前中にパンツにおもらししていた。

T子はこの当時他の人から自分の行為を促されることに圧迫感を感じるようだった。T子は日によっては母親や女性担任Eの勧めで幼稚部のトイレですますこともあったが、私の誘いにのことはなかった。深く結びついている私に行為を促されることはより圧迫感を感じるようになったのだろう。私はこの時期T子に対して排泄以外でもこちらから行為を促すことは極力避けるようにしていた。

《私と他の子どものやりとりをまねる》

6月1日 このところT子は私にだっこされて散歩に出るは「A夫君みただね。」と言い、更衣室から私のトレーナーを数枚幼稚部へ持ち込みその中から一枚選び私を着替えさせては「H夫君みただね。」と言い、トランポリンでおんぶされて跳びながら「のんでーのんでー。」(CMの歌)と一緒に歌いながら「Kちゃんみただ。」と言い、壁に張りついて「あれ？いないなあ。」と言いつつ私を誘っておしくらまんじゅうのようにくっつきながら「S夫君みただ。」と嬉しそうに言う。

T子が模倣しているのはここに出ている子ども達と私が昨年度よくやっていたやりとりである。T子は彼らと直接かわりを持つことは少なかったが、「O君みただ。」と模倣している相手を意識しながら彼らと同じやりとりを体験することで自分と彼らとを関係づけようとしているようにみえた。

《よその子どものスコップを借りたがる》

6月4日 公園の砂場で遊ぶ。今日は学校からこの前T子が欲しがったよその子どものスコップと同じ物を用意

したが、T子は学校の門を出ると近くの階段において持って来なかった。砂場に砂場道具をおいたままで他の場所で遊んでいるよその子どものスコップやカップで遊ぶうとする。

この当時T子は学校の砂場で遊ぶことは殆どなく砂場道具にも関心を示さないのに公園に行くとき必ず砂場に立ち寄り、そこに置いてあったり忘れられたりしているよその子どもの砂場道具をみつめて遊んでいた。そのことが何を意味するのか初め私は解らないままT子の砂遊びにつきあっていたが、T子は砂場道具が見当たらない時には遊ばないで素通りしていたことから、知らない子どもの道具を使うことでその子どもと一緒に遊んでいる気持ちになるのが目当てだったように考えられる。

《行く・行かない・行く》

6月15日 公園へいく途中でT子が「先生Tちゃん地下鉄に乗りたい？」と言う。「Tちゃん地下鉄に乗りたいの？」と聞き返すと「Tちゃん乗りたいの。先生乗ろうよ。」と言う。これまでも何度かT子にそう誘われたことがあったが、いざ実行しようとするときT子は思い止まっていた。公園の入り口近くの横断歩道で青信号で渡ろうとすると、T子はガードレールをしっかりと握って動こうとしない。「信号青だけどうするの？」とT子に聞くと「Tちゃん行かない。」と言うので「じゃあ行くのやめようか。」と応える。T子は信号が変わり車が動き出すのを見届けてから公園へ入り、30分程ブランコにふたり乗りしてから意を決したように「Tちゃん地下鉄に乗るの。」と駅に向い、実現した。

T子はこの時期新しい体験へ向きたい自分と踏みだせない自分との間で葛藤を繰り返しながら機が熟すのを待っているようにみえた。私はこちらが励ますことがT子の緊張を高めることになり心の動きを止めることになりかねないと思っていたので、この日もじっくり見守りT子が決めた方を支えようとしていた。

2. T子が保育者から離れて他の子どもや保育者とかかわりを持ち始めた時期(9月～12月)

《私がT子の傍にいない状況》

9月28日 T子は朝のうち私とひとあそびしてからひとりで水遊びを始める。私が傍にいても大丈夫そうなので離れる。私はホールでA夫に出会ってそのままA夫と散歩に出た。散歩の途中でバス停にさしかかった時、実習生と高学年(小学部)の校外活動に参加してバスを待っているT子に偶然出会った。A夫と私も合流するこ

とになり、T子が私と手をつなぎにきてT子と私・A夫と実習生の組合せになる。

9月28日 T子とままごとであそんでいるとK夫が「お買い物行こう。」と私を誘う。T子は「イヤなの。」とか「Tちゃんもお買い物行きたい。」と言う。他の担任がK夫を誘うが、K夫は私と行きたい。私は「Tちゃん、Kちゃんとお買い物に行って帰ってきたらTちゃんとお買い物に行くからね。」と約束してT子から離れる。T子は傍に私がいなくて他の保育者と遊んでいた。

K夫はこれまで登下校する以外は校外へ出ようとしなかった人で、私はK夫が自分の世界を広げようとしているように感じられたので申し出を受けたいと思った。私がT子から離れる場面で余り葛藤しなかったのは、私がT子の傍をしばらく離れても大丈夫だと思えるようになってきていたことによる。K夫は他人の感情に敏感な人で他の子供と深くかかわりを持っている保育者を誘うことは殆どしない。そのK夫が私を誘ったことから、T子と私との関係に他の人が入り込める余裕が出てきていることが伺える。

《幼稚園に行く日の朝》

10月12日 T子は幼稚園に行く日だが、朝まず兄を送って幼稚部に来る。学校を出る前に私とトランポリンに乗る。おんぶで跳んだ後T子は「先生座ってよ。」と私を座らせて向かい合う形になり、私の顔を蹴飛ばしたり髪を引っ張ったり頭突きをしたり噛んだりする。じゃれあっているというよりも真剣さを感じる。私は遊びにしようとして思い切りくすぐる。しばらくしてから母親が傍に来て「Tちゃん幼稚園どうする？」と聞くと「Tちゃん幼稚園行くの。」と応え、「先生待ってて。」と言い残して母親と幼稚園へ向う。

T子はこの当時幼稚園へ行く曜日の朝は必ずこのやりとりをしてその過程でどうするかを自分で決めていた。T子が外の世界へ向う時の緊張感の強さがよく伺える。T子はこのやりとりで私の中に既にあるT子を受け入れようとする気持ちと並行してT子を拒否しようとする気持ちを持つように挑発することで私の中に葛藤をもたらし、自分自身の葛藤を重ね合わせることによって解消しようとしていると見えていた。とはいえ私はT子が私が一番ひるみやすい顔へ向けての乱暴と「先生座ってよ。」とか「何よその言い方。」というようなT子の挑発的な言葉を受けることによって私自身の存在感を危うくし、T子への拒否的感情の方が強まって思わずT子をくすぐる手に力が入ってしまうこともあった。私はこのやりと

りが続いた11月の半ばまで、朝目覚めてからT子とのこのやりとりが終わるまではいいようのない気持ちの重さを抱えて生活しその後で平常心に戻るといふ毎日だったが、私の気持ちの重さはT子の気持ちの重さでもあるのだと考えて何とか持ちこたえようとしていた。

《車道に飛び出す》

10月12日 幼稚園から帰ってきてから散歩に出た。横断歩道のない車道を横切る際に車が来ていて渡れないことを伝えるとT子は「イヤなの。」と言って飛びだそうとする。私が「Tちゃんの後について行こうと。Tちゃん大丈夫かどうか教えてね。」と言うと、T子は腕を広げて私を自分の後に保護し左右をよく確認して「大丈夫よ。」と私を従えたまま渡る。

T子は自分で判断して行動しようとしており、私をその行動を承認してくれる存在としてみなしていた。

《私がT子の傍にいる状況》

11月2日 T子は朝私とトランポリンで遊んだ後で、H夫やS夫(兄)や男性担任とスライドを映して遊び始める。私はその間A夫にだっこで校内を巡回するのを要求されて歩き廻る。私は幼稚部を通る度にT子と顔を合わせるようになるが、T子は私の所へは来ないで遊びを続けている。

T子はこの頃から私が他の子どもと遊んでいるのを見ても、自分も他の保育者との遊びを続けるようになってきている。T子が他の人との関係を広げようとしている大事な時期なので、T子が私から離れていることに不安を感じているように見える時には私がT子の所に行けるよう担任同士で配慮していた。

《保育室でおしっこをする》

11月2日 おしっこを保育室でズボンをはいたまま立って私に笑いかけながら気持ちよさそうに出す。

T子は家ではトイレでおしっこをしていたことから、T子が幼稚部では教えてやっていないことが解った。T子は私の目の前で堂々とおしっこを出すということによって自分の内側にあるものを手放すことと自分の意志で自分を動かしていることをより実感しようとしているように見えたので、私はそのままを受け入れようとしていた。

《「T子の私」と「K夫の私」》

11月13日 K夫が私にトランポリンでおぶわられて眠っている所へT子も乗り込んできて「Tちゃんおんぶして欲しいの。」と言う。私はK夫の調子が悪そうなのでじっ

くりつきあいたい気持ちをT子に話して待ってくれるようにたのむ。そして「Kちゃんが元気になったらTちゃんをいっぱいおんぶするからね。先生約束する。」と伝える。T子は寝転がり私を見上げて「イヤなの。」とか「Kちゃんの次におんぶしてくれるの?」「後でおんぶしようね。」と私に話しかけてくる。私は背くことで約束は守るということ伝えてやる。

この当時T子は私にいつも受けとめて貰えるという思いが気持ちの底辺にあって、一時的ならば私と他の子どもとのかかわりを受け入れることができるようになっていた。

《一人しかいない自分》

11月14日 ブランコで私とふたり乗りをして高く漕ぐよう要求し、高くなった処でT子が「私は元気です。」「私は良い子です。」と大声で言う。

T子は一人しかいない自分という存在を強く意識しようとしているように見えた。T子が私を固有名詞として捉えているところもあって私に向って「私やってちょうだい。」と使ったりすることがあるが、この時には自分を表現する言葉だということを利用して使っていた。

《出口のない状況》

11月27日 スコップを持って散歩に出る。T子は植え木の茂みにスコップを投げ捨てて「取れない。」と顔をしめて言う。私が黙っていると「取れない。先生取ってよ。」と泣きながら要求するので取ろうとすると私の腕を遮って「イヤなの。」と拒む。取るのを止めると「取りたいの。」と言う。このやりとりを繰り返す過程で私の気持ちは平衡を失いかけてくる。その後T子はスコップを受け取りニコツとして今度は簡単には取れない茂みの方へ投げ込み、歩き始める。

11月29日 T子は醤油のボトルの中に押しこんである小さな玉を「取って取って。」と顔をしかめてせがむ。私は取ろうとするが取れない。次に赤ちゃんのガラガラの中の玉を「取ってよー。」と泣いてせがむ。私は何とかして取ろうと試みるが容器をこわさない限り取れない。それで「取れないねえ。」と言うとますますせがむ。いっそのこと割って中身を出そうかと思うが、そのことをT子が望んでいるようには見えないのでとにかくT子の気持ちが落ち着くまで取る試みを続けた。

T子は解決という出口のない状況に私を追い込み、私の動揺を引き出そうとしているようにみえた。しかし私はこの状況での気持ちの重さは余り感じていなかった。

T子が自分の中の葛藤を遊具での遊びに対象化することにより自分の中にも気持ちの重さを貯めこんでいないことによるのだろう。

《新しい体験の後で》

12月3日 T子は庭で男性担任におんぶされて嬉しそうにする。その後でH夫とT子と男性担任で東京駅へ電車を見に行こうということになる。T子は担任に促されてその場の状況に添って行動し、楽しく過ごしたようだ。T子は帰ってきて水遊びを始める。洋服が濡れたので母親と着替えている時に急に泣き出す。T子は私の膝にうずくまり足を母親の膝にかけて大きな声で泣き続ける。しばらくして泣き止め、すっきりした表情をする。

当時T子は大人の男性とのかかわりを避けるところがあつた。そのT子が男性担任としかも初めての遠出を実現したことに自分でも驚いたのだろうと私はこの時思った。今はそれに併せて、T子が自分の気持ちからというよりも状況の流れに添って行動している間に自分を見失い、泣くことと抱かれることで自分を取り戻そうとしていたと考えられる。

3. T子が他の子どもや私を含めた保育者とかかわる中で自分の意識を広げていこうとする時期(12月~3月)

《一緒に遊ぶことと差し出すこと》

12月6日 公園の砂場へ行く。5才の女の子が穴を掘っていて、T子はそれをじっと見ている。仲間に入りたそうにしているので私から女の子に「入れて。」と声をかけるとT子も同様に言う。女の子が了解したので、私がT子の名前を伝えると、T子も同じように伝える。二人は一緒に穴を掘り始める。そこへ女の子の妹がやってきて「畑に行ってきます。」と階段を十段程降りては「ただいま。」と戻ってくる遊びを始める。それを見ていたT子は「Tちゃんも行く。」と声をかけ、ニコニコしながら一緒に出かけていく。階段の途中でころんで私を見たが、泣かない。それから一緒に遊びだした男の子にブルドーザーを持って行って「どうぞ。」と差し出し、受け取られて嬉しそうにして私を見る。女の子の妹が使っていた道具を他の子供が使おうとすると、T子はさっと取り上げて女の子の妹に差し出し、「ありがとう。」と言われてニコニコ笑う。道具の持ち主が「帰るから返しに来て。」と呼び掛けると自分も他の子供に交じって戻し遊びが終わった。私が一緒に遊んだ子供達に「さようなら。また遊ぼうね。」と声をかけるとT子も同様に声をかける。「またあそぼうね。」と彼らからの声が帰ってきて、T子は満足そうにしていた。

この時T子は出会う子供と仲良く遊びたくて、彼らの様子を見て喜んで貰えることを探しており、そのことが日頃受け取る側に立とうとすることの多いT子をすすんで与える側に立つことを可能にしているように見えた。

《私が現実を提示することを》

T子にせまられているように感じる》

12月14日 T子はお昼頃病院の待合室で備品の熊のいぐるみと「熊ちゃんおはよう。お風邪ひいてるの？」等とおしゃべりして遊んでいるうちにぬいぐるみから離れ難くなる。しばらく遊んでは「熊ちゃんを返しに行こう。」と戻すが、エレベーターを待つ間に再び熊を抱いて遊び始めるというのを4・5回繰り返す。それから「Tちゃん熊さん借りるの。」と言って待合室を出る。借りて帰ろうとしているには感じられない。別の遊び場で乗って遊ぶ2台の車にT子と私は乗り、初めに繋がって走りそれから「バイバイ。」と言いつつ離れて走る遊びをする。T子は絵本を見たりままごとをしたりするが熊を返す決断をするのを後に伸ばそうとする気持ち伝わってくる。熊と3時間半程一緒に過ごし下校時間をかなり過ぎた頃T子が「幼稚園に帰ろう。」と言う。私はこの時現実を提示することをT子にせまられているように感じて「熊さんはどうするの?」と尋ねる。「いいの。これTちゃんだよ。」と言う。「え?それTちゃんのなの?」と聞き返すと「ダメなの。」と言いつつ大声で泣きだす。T子が泣いても私は黙って傍にすることに。T子が落ちて着いた処で「先生はこの熊さんが誰の物なのかTちゃんによく考えて欲しいの。」と言うと「病院のなの。先生返してこようよ。」と応える。T子は肩車を要求し途中で「先生返してきてよ。」と言いながらも待合室に着くと自分で戻す。

T子にとって頭では自分の物でないことを理解しても心でそれを受け入れ自分の欲求を抑制することはこれまでも難しいことだったが、この日は動かない現実として私を存在させて長い時間をかけて能動的に葛藤する中で受け入れようと努力しているように見えた。

T子はこの日以来、二月の初めまで散歩に出る度に熊に会いにっていた。熊を抱くのは15分位で、熊を手放す時の葛藤は自分で乗り越えていたが、回数を重ねる度に葛藤もうすらいで、楽に手放すことができるようになっていった。

《スカートで過ごした日》

12月15日 T子は遊び着に着替えようとせず一日スカートで過ごした。帰りに門の所で「幼稚園に行く。」と言出す。今日は幼稚園の終業式の日だった。母親が「も

うお友達は帰っているから今度行こう。」と言っても納得しない。それで母親とふたりで出かけて行った。園には先生達がいて話をしてきたそうだ。T子はとても嬉しげに「ただいま。」と帰ってきた。

T子はこれまでも幼稚園に行くのを迷っている時にはどちらにするか決めるまで着替えずにいた。この日T子が遊び着に一日着替えようとしなかったのは、一日のうちのどこかで幼稚園へ行ってこようという意志を持ち続けていたことによるものと思われる。

《受けることと与えること》

12月18日 朝、子どもや保育者達がクリスマスの飾りを作っていると、T子も絵を描きだした。T子は途中でホールへ行き、しばらくしてお弁当にしようと幼稚園に戻った。T子は先程遊んだテーブルの上をひとりで片付け始める。紙の切り屑はゴミ箱へ、使える紙は引き出しに分けて入れ、クレヨンは床に落ちているものも拾って引き出しにしまった。それからT子はお弁当用のお盆を二つ用意して、イスをふたつ並べて、自分のお弁当と私のお弁当をそれぞれのお盆に乗せてから座って嬉しそうに食べ始める。T子が「お水ちょうだい。」と言うのでコップに入れて差し出す。T子はご飯を食べた後弁当箱を片付けてからコップを洗ってしまう。

片付けやお弁当の準備はこれまで私が毎日T子の為にしてきたことである。このやりとりの中にT子が受ける側から与える側になっていることが伺えた。私はこの当時T子の片付ける様子やお弁当の準備をする様子が普段の私の手順とそっくりなのに驚いただけだったが、今改めて見直すとT子がこれらのことを自然にごく当たり前のこととしてやっていることにも驚かされる。私はT子に対してほめ言葉を発していないし、T子もそれを要求する素振りを見せない。

《すっきりした日》

1月10日 T子は朝私より先にきていて傍に保育者はいたがひとりのままごとをしていた。私もしばらく離れたところから見ていて、それから並んで遊びだした。T子は玩具の蜂蜜のラベルの貼ってある容器の蓋を「取って。」という。接着剤で接着してあるので力を奮い起こしてもはずれず、ねじ回しを使ってもうまくいかない。T子はおもちゃ箱から、取るのに使えそうだと思う玩具を2・3持ってきて「先生これで取れるかなあ。」と差し出す。私がそれらを使って取ろうとするのをじっと見ている。それでも取れない。T子は「取れないね。」と事実を受け入れて取るのをあきらめた。T子は途中でがすう

っと立ってトイレへ行き、おしっこをして水を流して戻ってきて、何事もなかったかのようにあそびを再開する。更に遊んでいる最中に私はR夫に何度もおいかけてここに誘われてその度にT子の傍を離れたが、ひとりで遊びを続けていた。

この日T子の気持ちに落ち着きを感じられ、その安定感がこの日のT子の生活そのものに表現されていた。

《どうして泣いているの?》

1月10日 H子の泣き声が聞こえている。ちょうど傍を通ったH子の母親に、「Hちゃん泣いてるの?」と尋ねる。「そうなの。」と言われると「どうして泣いているの?」と理由を聞き、その後で「Hちゃんかわいそうだね。」と言う。

T子が自分の遊び相手のH子の泣いている感情を思いやる気持ちがこの時伝わってきた。

《先生Tちゃん疲れちゃった》

1月10日 午後女性担任EとH子と3人で公園に出た。もっと遊んできたかったようだが降園の時間になったので切り上げて帰ってきたそう。私がテーブルでおやつを食べているT子の隣に座ると私にもたれかかって「先生Tちゃん疲れちゃった。」と言う。母親や他の担任に帰りの支度の誘いを受けても「まだ。」と言って動こうとしない。しばらくして「ママ帰る。」と母親を呼ぶ。

T子は私に抱かれなくても、自分の気持ちを言葉で伝えて解って貰うだけで気持ちを楽にしたようだった。

この日以来T子は気持ちが疲れたように感じて私の傍でゆっくり過ごしたい時にはこの言葉を使っていた。

《「自分で」と「誰の?」》

1月24日 T子は公園の砂場で穴を掘ながらで「Tちゃん自分でやるよ。先生自分でやんなさいよ。」と言う。
1月25日 事務室の遊び場で遊ぶ。T子はの玩具の乗り物に乗って遊んだあと「これ誰の?」と聞く。私「誰のかしらね。」T子「ここのよ。」私「ふーん。ここのなんだ。」T子「そうなんです。」絵本を見た後でまた同じ会話になる。それから「先生帰ろうよ。」とそれらを棚にしまっ出て出る。

T子は自分を意識する機会が増える中で自分と私との間に境界をつけようとしているように見えた。そのことと関連して自分の物と他人の物との区別も頭と心の両方で受け入れるようになってきていることが、敢えて言葉に出して再度確認しようとしているところに伺えた。

《一人で駆け出す》

1月26日 T子はホールの入り口から庭のトランポリンでT子と同年令位の小学部の子どもの妹ふたりが遊んでいるのをみつけて「先生行ってみようよ。」と言いつつ一人で駆け出し、そのままトランポリンに乗って一緒に遊びだした。

T子は私の援けを借りずに主体的に他者と出会うとしていることが伺えた。

《買物》

12月7日 T子は私の財布を自分で持ってスーパーマーケットで買物をする。T子はお菓子をひとつ選びレジへ行く。前に3人並んでいる。T子は「順番なの?」と言うので「順番なの?」と問い返すと「そう順番なのよ。先生待つてなさい。」と応える。T子の番がきて財布から硬貨を出す。出しながらそのつど「もっと?」と私に聞く。私は代金以上の額になるまで背く。T子はおつりを受け取って財布に入れようとして、お金を床に落とした。私は一瞬緊張したが、T子は落ち着いて十枚程の硬貨を拾って財布にしまい、「先生持っててちょうだい。」と財布を私に戻した。

1月14日 散歩の途中でT子は「買物をしたい。」と言う。「Tちゃんが買物に行こうって言わなかったから私お金を持って来てないの。」と言うと納得する。駅の改札口の手前から電車を見ながら「電車に乗りたいたいね。」と言う。「今度乗りたくなったら言ってね、お金持ってくるから。」と言うと「はい。」と応える。お菓子のポスターを見て「これ買って欲しい。明日買おうよ。」と言うので私も「はい。」と応える。

1月24日 T子は午後マーケットでチョコレートを買った。今日は兄が学校からスポーツセンターのプールへ行っていてT子は母親と迎えに行くことになっているので公園で食べる暇がない。T子には買物に行く時点で説明しておいた。T子は帰り道少し急ぎ足になって「いそいで帰ろうね。ママが待つてるから。」と言う。それから「(チョコレート)帰ってから食べようね。Tちゃん机でイスに座って食べるの。お盆に乗せて食べるのよ先生。」という。私は「ふーん。(納得)」と応える。

T子はこの当時このような体験を重ねる過程で私とのやりとりを通して自分の置かれた状況を理解し、思い通りに行かない現実もすすんで受け入れようとして、その中で主体的に行動しようとしていることが伺えた。T子は買物を通して自分も幼稚部以外の社会に一人前に参加していることを実感しようとしていたのだろう。

《自分の財布》

1月29日 今日のはめずらしくT子がバックを持って散歩に出る。帰りに「先生お買い物しよう。」と言うので、「私お金を持って来ていないの。」と応えると、「Tちゃんお財布持ってるわよ。」とバックから財布を取り出しで見せる。

財布の中身はお年玉の残りで、T子が家から財布を持ってきていた事は私はもちろん母親も知らなかった。

T子が自分で望んでいることを自分で実現しようとする気持ちがよく表れている。

《私に叱られること》

2月18日 T子が朝一番に遊んだ果物やお菓子のプラスチックのおもちゃでR子が遊びだした。その時近くのトランポリンにおぶわれて乗っていたT子は降りてR子が手にするものをこごとく取り上げたり、R子を押ししたりする。R子は大泣きする。私が「Rちゃんがせつかく楽しそうに遊んでいるのにどうしてそんなことするの?」と言うとT子は悲しそう顔を背く。T子と私はテーブル越しに向い合う形となる。T子は右手で顔を半分覆うようにしながら切なげな顔をしたり、にやっと笑ったりしつつ私の顔を伺っている。私はその間T子にR子の身になって考えて欲しいという思いをT子への眼差しの中に込める。R子の泣き声がおさまりかけた頃私は「先生はTちゃんに、Rちゃんごめんさいって謝って欲しい。」と言うと背き、T子はR子の所へ行って申し訳なさそうな顔を背く。R子の頭を撫でる。

この当時私はT子に「T子にはT子の思いがあるように私にも私の思いがある」ということを、主に楽しい場面で「私」という言葉を意識的に使うことによって理解してもらおうとしてきた。ここでのやりとりはその延長線上にあるもので、この時私はT子のR子に対する行為についての私の気持ちを、言葉で丁寧に説明して解ってもらおうとした。このやりとりは、どんな状況の中でもT子の存在を受け入れていることに変わりはないとする私の態度がT子に信頼されているという自信を地盤にして成り立っている。

《卒園式》

3月9日 幼稚園の卒園式。T子は練習に一度も参加していなかったが、母親から離れて子供達に混じって、周囲の子どものしぐさを見ながらそれに合わせて動いて参加したそうで、母親が感心していた。幼稚部に帰ってきたT子は嬉しくてたまらない様子で、保育者達からお祝いの言葉を受けてニコニコのしどおしだった。私にトラン

ポリンにおんぶされて乗り、「もっともっ。」と高く飛び上がったがった。

T子が緊張感の深い卒園式に練習なしで参加して、しかも母親から離れても臆することなく周囲の状況を見ながら他の子供達と同じように動いたところにT子の自分に対する自信の強さを感じさせられた。

T子は幼稚園の出席日数は少なく長期欠席もしたが、自らの意志で所要所で登園し、卒園まで園との関係を継続してきた。その自信がこの日のT子の表情に現われていた。

IV. 保育における自我の発達と相互的行為について

昨年度の研究で浜口⁽¹⁾は保育において自我は子どもの自我の発達を契機として保育者の自我も機能し、発達することを明らかにした。相互的行為は相手と互いに調整し合って動く生命的行為である。それは互いに相手に応じて自分を変化させ、新たな関係を作り出す力である⁽²⁾という意味において、保育者と子どもの自我の発達は相互的行為の変容に関連がある。

V. 保育者と子供との相互的行為の成立について

子どもと保育者との相互的行為を成立させる根幹に情動のかかわりが認められる。情動のかかわりとは、子どもと保育者との心が相手に向けて動き、互いに相手との心の交わりが感じられるかかわりである。情動のかかわりと思える子どもと保育者の関係は、間主観的かかわりである。それは、両者の過去の関係を地盤とするだけでなく、未来の関係をも予測しながら、その時々を今を中心に展開する。保育者と子どもは相互的行為において、相手の行為を自分へ向けての表現であるとみなし、相手との関係の中で、その行為の持つ意味を、相手の側に立って理解しようとし、その理解に基づいて自分の相手への表現として相手へ向けて行動することになる。浜口が述べている主体性、相互性、持続性という子供の自我の側面は保育の実践における相互的行為において顕著に現われるといえる。

文献・注

- 1) 浜口順子「保育における『自我の発達』に関する概念検討」1989 日本総合愛育研究所紀要
- 2) 津守 真、他「ある養護学校の『保育』」「発達」Vol. 10No. 36, 1988